

「英語『で』学ぶ」ためのいくつかの方法について

名取 涼子

1. 「英語『で』学ぶ」の重要性

先日ある保護者が、「息子のために、『AIに奪われない仕事』について、勉強しているんです」と話していた。移り変わる時代のなかで、「言語を巧みに操ること」「高度で繊細なコミュニケーションが取れること」の重要性は、社会でますます存在感を増している。それは学校現場においても同様で、とりわけ「英語」という教科においては、その流れ（というか、ある種の圧というか）が非常に顕著であるようだ。「文法」や「単語」は特に取扱注意で、それは教え込みや一方通行授業に陥りがちだから……というのは、業界でもしばしばなされる議論。それをいかに **communicative** に料理するかが、命和を生きる我々英語教師の腕といえよう。

これからの時代を生きる生徒たちに生きる力を授ける「英語を学ぶ」から「英語『で』学ぶ」授業へのシフトは欠かせないことだと考えている。すなわち、英語そのものを学ぼうという姿勢から、英語で述べられた「内容」のほうへ、我々の **focus** を移していく必要があるのだ。受験に勝つことが目標で、単語や文法などの知識を入れこむことを目的とした授業では、時代の求める「巧みな言語力」や「高度で繊細な英語力」は到底実現できない。単なる知識や基本的な文法ルールなど、今時スマホですぐに調べられる。そういう時代なのである。次項からは、「英語『で』学ぶ」授業のための3つの工夫について、授業者所感を交えつつ、述べていきたい。

2-1. 題材がたちまち「自分ごと」に

一なりきり音読

向いている題材：自伝、プレゼンテーション

「なりきり音読」と呼ばれる音読手法がある。詳細は割愛するが、三人称をすべて **I, my, me, mine** におきかえて音読する手法である。授業におけるコミュニケーションアプローチは多く存在する中で、こ

れは非常に簡単であり、かつ、教育的効果も高い方法である。

例えばコミュニケーション英語Ⅱで「ココ・シャネルを題材にした自伝的文章」でなりきり音読を行ったとき、女子の多い専門就職クラスで英語には苦手意識を持つ生徒が多かったのだが、とても授業が盛り上がった。ファッションのパイオニアになりきって雰囲気たっぷりに音読し、ペアの相手と笑い転げている生徒の姿が多く見られたのだ。（英語の音読で、こんなに盛り上げられるのかこの人たちは……？と驚いた。）あとで感想を聞いてみたところ、「楽しい」「本当に自分の身に起きた話のように感じられて、内容がすいすい頭に入る」ということ。さらにこの音読法では、三人称の固有名詞・代名詞を瞬間的に **I, my, me, mine** に変えて読むので、ちょっとした脳トレにもなるのである。伊藤氏の著作でも、「音読するときにはすでに修正を施した英文ではなく、あくまでオリジナルを見ながらリアルタイムで自分の物語に変えていくように要求するほうがより効果的」とのこと。

同じくコミュニケーション英語Ⅱから「4人の学生がプレゼンテーションを行う」というスタイルの単元では、4人グループを組ませ、教科書本文の名前をすべて自分の **real name** に変えて、クラスの前で暗唱するというタスクを行った。プレゼンテーション形式の単元の場合、教科書の到達目標が「プレゼンテーションをしてみよう」であるケースが多いため、実際に課題を見つけさせ、それに関するリサーチをさせ、まとめさせ、英語原稿を書かせ、人前で発表させ、評価するのが一番である。確かにそうである。だがそれには、膨大な時間と労力がかかる。手間暇を惜しまず、生徒の成果物を確固たるループリックに基づいてきっちり評価することができればそれに越したことはない。だが様々な理由で、そこまで授業時間を割くことがどうしても難しいと

いう場合、そんな時には、この「なりきり音読&プレゼン」で、時短かつ、いいとこ取り、ローコストな新時代のプレゼンスタイルとして、諸先生方、いかがだろうか。

2-2. 自分の書いた文章が、クラス全員の学びに

—TF クリエーション

向いている題材：どんな題材でも可

リーディング指導のなかで、おおまかな内容が取れているかどうかを測るのに、「True or False」を用いたことがある先生方は多いだろう。「True or False の扱い方」だけでも、語られるべきことはずいぶん多くあるが、ここでは内容に深く入り込んでいく工夫の一つとして、「TF クリエーション」を取り上げたい。といっても非常にシンプルで、「教科書本文を題材に、TF 問題を作り、ペアでお互いに出し合う。よいものは全体で共有する」—たったこれだけなのである。これが効果てき面。やってみると、ほとんどの生徒がきちんと取り組むうえ、教材の理解度もかなり高まる。出題する以上、間違えたら大変。ましてや友人同士であれば今後の人間関係にも影響が……。したがって彼らは、自分の作った問題にしっかり責任を持たなければならない状況に置かれる。クラスメイトに解説するためには、まず出題者たる自分がしっかりと本文を理解しておかなければならない。事前に「本時の最後に TF 問題を出题してもらおう」などと予告するだけで、本文を読むときの目の真剣さが変わる。彼らは「内容」を読み取ろうと頑張っていたのであり、英語はその手段にすぎない存在となる。

指導者は机間指導をしながら、よい問題を考えている生徒を探し、それをクラス全体に問いかけるとよい(口頭でも板書でも、ICT を用いてもなおよい)。その答えの根拠は、該当の出題生徒に解説させる。生徒のなかで学びが循環する、よい授業空間を作ることが可能だ。ちなみにこれを応用して、共通テストで注目された「Fact/Opinion」問題を作らせるというのでも、力がつくと思われるのでおすすめである。みずから出題者となることで、「出題者の意図を知る」受験突破の為の糸口ともなるだろう。

2-3. 数字が伸びるからやる気になる

—Speech+Essay writing with WPM

向いている題材：重すぎない題材がよい

これはいわゆるアウトプットに主眼を置いた、「スピーチ」と「ライティング」を合体させたものである。

まず生徒は提示されたトピックに対して、ペアの相手に1分間スピーチをする。お互いにスピーチを終えたら、同じトピックについて作文をさせる。やはりたったこれだけなのだが、一つだけとても重要な要素がある。それはスピーチにおいて WPM を記録することである。生徒に言わせると、自分の話した量が数字で示されるかどうかで、モチベーションが全然違ってくるらしいのだ。相互スピーチの際、ペアの相手の生徒に WPM を数えておいてもらうとよい。それを英作文用紙の隅にでも書いて提出させ、教師の側で控えておいて、数か月ごとにフィードバックしてやる。発話数の伸びを実感させることができるだろう。

ここでひとつ、失敗例を述べる。WPM を測りながらのライティング活動を定期的にやりだして数か月、発話量も伸びてきていた秋ごろのこと。突然、数字が伸び悩んでしまったのである。それなりに英語の学習を積んできたはずなのに、ペアの相手に神妙な面持ちで黙ってしまった生徒たち……彼らに何が起きたのか。種明かしをすると、実はこの時学んでいたのは、「第二次世界大戦中の日本軍」「硫黄島からの手紙」といった単元で、トピックも、「第二次大戦について何か知っていることはあるか?」「なぜ司令官は部下に家族への手紙を書かせたのか?」などであった。(その手紙の内容が重く、おまけに、イメージを膨らませるために、と用意した戦争の映像を視聴した後でもあった。「この単元は精神的にかなり厳しかった、多分日本語でも、うまく言葉が出なかったような気がする」というのが、後から聞いた生徒の談である)授業者としても、あとで職員室に帰ってから反省しきりであった。「気軽に話すには内容が重すぎたし、生徒が十分な背景知識を備えていなかったと痛感したのである。このような失敗をできるだけ回避するには、①リーディング指導の段階で、しっかりと生徒を題材の世界観に引き込み、関連語句や周辺情報をインプットする」「②なおかつ、トピックの立て方を取っつきや

すいものにする」といった配慮が必要だろう。我々が思っている以上に、「生徒」と「題材」とのあいだには、深いミゾが口を開けているものなのだ。ましてやそこに介在するのが、普段使い慣れない異言語であればなおさら。「授業と先生」というものは、そんな生徒と題材とをつなぐ、頼もしい「橋」のような存在でありたい。

3. 「英語『で』学ぶ」授業の先に

すなわち「英語『で』学ぶ」ということは、目的を「英語自体」から「内容」へとフォーカスをずらし、生徒たちの中にあるものを発信する活動につながるのである。そういう事を意識した活動は、たとえ高い英語力を有していないクラスでも十分に可能であるということは、これまで本論で述べてきた通りである。そういう学びの空間においては英語自体を研究することよりもむしろ、「伝えたいことがなんであるか」「それをいかに伝えるか」が、重要となってくる。よりよいコミュニケーションのためにこそ、正しい文法や豊かな語彙が必要になるのである。そのために詰め込み暗記や問題演習が必要となる一願わくば英語教育は、そういう順序を辿るのであってほしい。生徒たちには、自分のなかにたくわえた素晴らしいものを、たくさんの人に伝え感動させられるような人間に育ってほしいと思っている。英語がそのためのツールのひとつとなれば冥利に尽きる。

新米の頃から指導法をあれこれ考えメモしてきたノートが、先日7冊目になった。ばらばらとめくりながら、十年ほどでずいぶん英語の授業も変わったのだな、これからもきっと変わっていくのだろうな……と思い、今回の記事を寄せるに至った。刻々と変化する時代にあって、「何をどうしたら、生徒たちをもっと強くしてあげられるのか」を常に考えながら、進路指導や生活指導、英語の授業を行ってきた。

振り返れば私が英語教師となった平成20年代初頭というのは、平成の英語教育史における「タスク型」の英語授業への過渡期にあたるのだった。そのような大変革期に、新卒社会人だった私は英語を教える立場となった。それまで自分が受けてきた授業はいわゆる「訳読式」であったため、「タスク」と言われても初日から何をどうしたらいいのかわから

ず大変な思いをした。それが懐かしく思われるこの令和の世においても、英語教育は未だ進化の途中である一いや、「英語教育」と呼ばれるものが、進化を完全に終えるなどということはおそらくありえない。

「先生」と呼ばれるからには、常に学び続けなければならない。身の回りの諸先輩方の実践から学ぶべきことは、いまだ多くあるのであるが、私は「生徒たちの学びの最善とは何であるか」を常に模索し実践しつづける教師でありたい。

参考文献

教育出版(2008). 『アウトプット重視の英語授業』.
伊藤治己編著.

(山梨県立都留興譲館高等学校 教諭)